

アトモスフィア

中堅層を厚く

上田 卓也*

成田空港に帰国すると、日本はなんて安全で清潔で快適な国だと実感する。また、研究環境についても、欧米のレベルとほとんど格差がなくなり、一部では日本の方が進んでいることもある。かつては深刻な問題であった若手研究者の雇用についても改善がすすみ、オーバードクターという言葉も死語になりつつある。私は学位を取得した学生に海外での研究体験を薦めてはいるが、近頃は説得に自信がもてなくなってきた。日本に職がなく、雇用格差に流され海外へポスドクとして出稼ぎを余儀なくされた私のような者には、なかなかよい説得理由が浮かばず、悩みの種の一つである。

若者の内向き指向への危機感から、グローバル 30をはじめ講義の英語化などの国際化の推進が進められている。しかし、学生や研究者が活発に交流するために、それなりの強い動機が必要である。勾配がなければ、物質輸送は生じない。交流を妨げる障害を取り除くことは大切であり、制度の標準化はある程度は必要ではあるが、ほどほどにすべきであろう。世界中が金太郎飴のような大学ばかりになることは、逆に人的交流の著しい停滞に陥る危険性を孕んでいる。日本中にあるシャッターの降りた「〇〇銀座」の徹を踏んではならない。国際化の中でアカデミアがなすべきことは、研究面・教育面での魅力ある個性を作り出すことである。

しかし、特徴を作り出せと言うことは簡単であるが、現実はいへん難しいことである。独創性を強調する研究ほど、内実がともなわないことが多いのもご存じのとおりである。個性を生む道筋は、奇を衒わず、面白いと思ったことを継続して淡々と探求し続けることしかないのではなかろうか。大通りで人混みの後を追いかけてもセレンディピティーは生まれず、また流行からは本当の個性は生まれない。个性的研究の育成には、「継続性」が常時確保できる研究環境の整備がポイントではないかと思う。選択と集中ということが強調されているが、基礎研究の研究費については、基本は広範かつ均一に配分すべきである。PIになれば、ほぼ無審査で毎年2,000万円程くらいを10年単位で支給してはいかがであろうか。ポスドク1名とともに地道に10年研究を進めていけば、個性のある研究が結構生まれるはずである。2,000億円で1万の研究室が安心して落ち着いて研究ができる。もちろん、大型プロジェクトを立ち上げたい場合は、プロジェクト用の研究費に申請するようにすればいいのである。この大型プロジェクトは、目的指向型であるから、その目的を精査して選択と集中をはかればよいのである。つまり、研究費についてはしっかりとボトムアップ型とトップダウン型の分離を徹底してはかるべきである。ボトムアップ型では持続的に健全な中堅研究者層を充実させることを主眼として、个性的研究を生む基盤形成に徹すべきである。

こうした高福祉型(?)の研究体制については、研究者がハングリーでなくなるという批判が当然おきるであろう。めぐまれた環境に安住することを防止する手っ取り早い方法は、競争原理を持ち込み業績主義という鞭を当てることである。たしかに、業績重視は一時的にはカンフル剤として効果があったようであるが、その反動として弊害がいたるところで露呈しつつある。その最たるものは、捏造である。また、企業に就職した方が落ち着いて研究ができるとして、アカデミアに早々と見切りをつける若者も増加している。悲しいことである。研究は、飴や鞭といった損得勘定ではなく、自律的かつ内発的になさなければ、研究の質の継続的な維持は困難である。精神論にこだわり、研究者としての矜持を中心に据えることが、今なすべきことではないか。

日本に来た留学生は、勤勉さ、誠実さ、清潔さ、モラルの高さ、きめ細やかさ、に感心するようである。日本の研究を支えて来たのは、一部の天才のひらめきではなく、むしろこうした文化面、精神面での上質さではなかろうか。もの作り立国とアピールするのによいが、匠の技はこうした精神的土壌があってこそ生まれたのである。安易なグローバル化によって、こうした基盤が失われることは、日本の魅力を失わせ、逆に人材の流入を妨げることになろう。また、海外へ自信をもって人材を送り出せなくなる。

2200年前に、まだ弱小国であったローマは、軍事的天才ハンニバルの侵入により存亡の危機を迎える。市民から構成されたローマ軍は、プロ集団の傭兵からなるカルタゴ軍に連戦連敗、信じられないほど見事に負け続けるが、自らのスタイルを変えず愚鈍に戦い続け、20年後にザマの戦いで完勝する。一人の天才研究者が榮譽を手にするのではなく、大多数のまじめな中堅研究者が毎日の実験に充実感を覚えるような状況こそ、未来を招き寄せるのではないだろうか。

*東京大学教授